

ふー。とりあえず一息だな。手首を曲げて伸ばし、調子を確かめる。
「グラーツイエ」

「いや。…それでお前は何でここに…」

「待った。質問は後だ。それより先に、あれを何とかしないと」

机の上の箱を親指を立てて指し示す。ルキーノの目が大きく見開かれた。

「まさか——爆弾か?！」

「多分、そのまさか」

不用意に近づこうとするルキーノを手で押し止める。アンタ、何でもかんでも自分の目で確かめようとすんなよな! ったく。

「今、何時だ: :?」

机の上の箱についた時計を凝視しながら、ルキーノが訊いてくる。

「へ? アンタの時計は: :? てそうか。今、ないんだけ」

スーツの袖口を上げ、ジャンは時計を確かめた。針は午後一時三十七分を指している。

「あつちは四時四十二分だ」

「へ? え? でも: :」

ルキーノの言うとおり、箱の時計は四時四十二分: :あ、今は四十分三分、だな: :を示している。ジャンはもう一度袖をまくり上げ、確かめた。何度見ても一時三十分: :今は八分だ。

ルキーノが舌打ちをする。

「今まで通りだつたら、そつちの時計で五時きっかりにボンッだな」

「…実際の時間で、つてことも有り得るぜ?」

ジャンが一応、申し立ててみる。その間も二人の目は止まることはなく、脱出経路を探していた。カチカチと時計が追いついてるように、刻一

刻と、長針が真上に向かつて刻まれる音と床板が鳴る音が二重奏となつて辺りを支配する。

「そつちで悠長な犯人なら、逃げ出す猶予もあつて助かるんだがな」

ルキーノがドアの辺りを調べながら、忌々しうに呟いた。

確かに、三時間ずらしているのは、そういうことなんだろ。初めが二時、次が三時。ルキーノが襲われたのが四時だったから。その後の強襲は時計、使われてなかつたし。

しかし、プラス五分が気になる。几帳面な犯人とベルナルドは評していた。だから、尚更に。犯人たちの姿を思い出して、ジャンは拳をどこかに叩き付けたくなる衝動に駆られた。だが、そんなことをしている暇はない。

「確実とは言えないが、猶予が出来たんだ。その間に何とかこの部屋から出ないとならんわけだが: :」

ジャンが見上げるほど背の高い男が、更に上に視線を向ける。そこにあるのは天窓だ。ルキーノの肩にジャンが乗つたら何とか届きそうな、高い位置にある。窓はそれだけ。

窓枠の下に出つ張りのような台があるところを見ると、外に出られるのだから。ならば、梯子か何かがあるはずだが、影も形も見当たらない。

正面のドアには鍵がかかっている。他に逃走経路はなきぞうだ。その間も、時計の秒針は止まることなく進んでいく。ルキーノは上を見上げたままジャンに訊いてきた。

「どう思う?」

「どうも何もドアをぶち壊す、つてのが手取り早いんしゃねーの?」

ルキーノの思惑通りになど、乗つてやるものか。窓は却下だ。逃げられたとしても、どちらか一人だけになつてしまふ。この場合、上に乗るの

ろつてんだ。

出来る限りの悪態をついて落ち着くと、むなしさだけが残った。小振りの鍋に入った、また湯気の立っている料理を見る。

「チキンスープ。無駄になっちゃった……」

明日の朝食にでもするか。ああ、そつだ。栄養満点でいいかもネ。そつ、自嘲気味に笑つた。

そこで、返つてくるはずのない返事が返つてきた。

「なんだ。こんなところに籠もっていたと思つたら、料理してたのか」

「へ。」

「そついやささき、腹にたまるものとか何とか言つてたな」

振り向くと、長身の影。普段よりも幾分か怠そつに伸ばされた腕が、先ほどまでかき混ぜるのに使つていたレードルを掴んだ。

「ふうん。うまいじゃないか」

デカイ口を開けて、載つたスープを一気に喉に流し込んでいる。そんなので味がわかるのかと思つたが、うんうんと頷きながら感想を述べてくる。

ジャンは男の名前を呼んだ。

「ルキーノ……」

「お前が作つたのか？」

「他に誰が作るんだよ……」

どうしていいのかわからななつて、ジャンは目を逸らした。厭味のような言葉が口についてしまつて、自分でもげんなりする。もうちよつと言ひ方つてのがあるだろう、俺。また、気まずくなるのかと思つと、さらに気分が落ち込んだ。けれど――

「そつだな……お前しか、いない」

かけられた声が思ひの外優しくて、思はずルキーノを見上げた。子供をあやすように頭を撫でられる。

「俺は風呂に入つてくる。後でそれを食べさせてくれ」

スープをききして笑つと、ルキーノはキッチンを出て行つた。

ジャンは思はず、自分の頬をつねる。痛い。あまりのことに現実かどうかと疑つたが、どうやら夢ではないらしい。

レンジのゴックをひねつた。カチカチカチと音がして火が点く。弱火に落とすにも関わらずその火は、何だか温かく感じられた。

熱いくらいの温度に保たれた湯船に体をつける。体の熱が上がつたらだろうか、くらりと、と視界が揺れた気がした。ルキーノは湯をすくつて顔を洗い、覚醒を促す。

よもや自分が風邪を引くとは。こんなこと何年ぶりだろうか。しばらく覚えのない体の怠さに、苦笑するしかない。

ぼんやりと湯船につかりながら明日の予定を考える。何が何でも熱を下げなければ。そつでないと、あの心配症の力ポに無理失理休みをもぎ取られそつだ。

ジャンの顔を思い出し、笑みがこぼれる。先ほどはあんなにも苛立つたというのに、不思議なものだ。

ぱしやり、と体を動かすと一緒に湯も波立つた。いい湯加減だ。ああ見えてジャンは結構配りが細かい。先ほどのスープもちゃんとルキーノの好みに合わせてあつた。そんなことを思い出すと、さらに怠い体に何かが染み入るようだつた。